

## 令和元年 地盤沈下調査報告書

### 掲載内容の修正

観測井の地下水位と変動量について、集計上の誤りがありました。このため、「表-5 (1) 観測井の地下水位と変動量 (区部)」(28ページ)と「表-5 (2) 観測井の地下水位と変動量 (多摩地域)」(29ページ)、「図-5 令和元年の地下水位変動状況図」(12ページ)を修正しました。これに合わせて、本文中の記述を以下のように修正したものを掲載しています。

修正前	修正後
<p>2 ページ 8 行目から</p> <p>次に、1年間の変動状況を見ると、地下水位は、42地点のうち41地点で上昇し、低下したのは多摩地域の町田南の1地点のみである<sup>注2)</sup>。</p> <p>また、その変動状況を観測井ごとにみると、地下水位が上昇した観測井は91井のうちの87井であり、上昇量が最も大きいのは稲城市矢野口にある稲城観測井の3.58mである。一方、地下水位が低下したのは4井であり、低下量が最も大きいのは府中市武蔵台二丁目にある府中第1観測井の0.60mである。</p>	<p>2 ページ 8 行目から</p> <p>次に、1年間の変動状況を見ると、<b>地下水位は42地点すべてで上昇し、低下した地点はない<sup>注2)</sup></b>。また、その変動状況を観測井ごとにみると、<b>地下水位は91観測井すべてで上昇している。上昇量が最も大きいのは府中市武蔵台にある府中第1観測井の8.35mである。</b></p>
<p>2 ページ 27 行目から</p> <p>また、観測井ごとにみると、最も低いのは足立区神明南二丁目にある神明南第2観測井の T.P. -9.58mであり、最も高いのは世田谷区粕谷一丁目にある世田谷観測井の T.P. +34.27mである (表-5)。</p>	<p>2 ページ 24 行目から</p> <p>また、観測井ごとにみると、最も低いのは足立区神明南二丁目にある神明南第2観測井の T.P. <b>-9.02m</b>であり、最も高いのは世田谷区粕谷一丁目にある世田谷観測井の T.P. <b>+34.94m</b>である (表-5)。</p>

修正前	修正後
<p>3 ページ 2 行目から</p> <p>また、観測井ごとの変動状況は、48井のうち46井で地下水位が上昇し、2井で低下した。低下した2井は、板橋区赤塚三丁目にある上赤塚第1観測井の0.16mと、練馬区谷原四丁目にある練馬第1観測井の0.06mである。一方、上昇量が最も大きいのは、世田谷区粕谷一丁目にある世田谷観測井の0.82mである（表－5）。</p>	<p>2 ページ 28 行目から</p> <p>また、<b>観測井ごとの変動状況も、48井すべてで上昇した</b>。上昇量が最も大きいのは、世田谷区粕谷一丁目にある世田谷観測井の<b>1.49m</b>である（表－5）。</p>
<p>3 ページ 19 行目から</p> <p>観測井ごとにみると、最も低いのは三鷹市牟礼四丁目にある三鷹第2観測井のT.P. +14.17mで、最も高いのは武蔵村山市三ツ藤三丁目にある武蔵村山第1観測井のT.P. +96.33mである（表－5）。</p> <p>次に、1年間の変動状況をみると、地下水位は18地点のうち町田南の1地点のみで低下し、17地点で上昇した（図－5）。</p> <p>また、観測井ごとの変動状況は、43井のうち低下したのは2井のみであり、41井で上昇している。低下した観測井は、府中市武蔵台二丁目にある府中第1観測井の0.60mと、町田市高ヶ坂三丁目にある町田南第1観測井の0.44mである。なお、府中第1観測井の低下量は都内での最大低下量である（表－5）。一方、上昇量が最も大きいのは、稲城市矢野口にある稲城観測井の3.58mで、これは都内での最大上昇量である（表－5）。</p>	<p>3 ページ 13 行目から</p> <p>観測井ごとにみると、最も低いのは三鷹市牟礼四丁目にある三鷹第2観測井のT.P. +<b>16.85m</b>で、最も高いのは武蔵村山市三ツ藤三丁目にある武蔵村山第1観測井のT.P. +<b>97.61m</b>である（表－5）。</p> <p>次に、1年間の変動状況をみると、<b>地下水位は18地点すべてで上昇した</b>（図－5）。</p> <p>また、<b>観測井ごとの変動状況としても、43井すべてで上昇している</b>。上昇量が最も大きいのは、<b>府中市武蔵台にある府中第1観測井の8.35m</b>であり、これは都内での最大上昇量である。この観測井では平成31年6月中旬から地下水位が上昇を開始し11月初旬以降高い状態が続いている。次いで<b>上昇量が大きいのは稲城市矢野口にある稲城観測井の5.89m</b>であり、平成31年3月中旬から地下水位が上昇を開始し、令和2年1月まで<b>上昇が続いた</b>（表－5）。</p>
<p>5 ページ 3 行目から</p> <p>区部における令和元年1年間の地下水位の変動状況をみると、地下水位が低下した観測井は48井のうちの2井のみである（表－5）。</p>	<p>4 ページ 30 行目から</p> <p>区部における令和元年1年間の地下水位の変動状況をみると、<b>地下水位は48観測井すべてで上昇している</b>（表－5）</p>

修正前	修正後
5 ページ 21 行目から	5 ページ 14 行目から
<p>多摩地域における令和元年 1 年間の地下水位の変動状況を見ると、地下水位が低下した観測井は43井のうちの2井のみであり、41井で上昇した(表-5)</p>	<p>多摩地域における令和元年 1 年間の地下水位の変動状況を見ると、<b>地下水位は43観測井すべてで上昇した</b>(表-5)。</p>
8 ページ 34 行目から	8 ページ 28 行目から
<p>また、1 年間の変動状況を見ると、地下水位は、42地点のうち41地点で上昇し、低下したのは多摩地域の町田南観測所の1地点のみである。</p> <p>次に、その変動状況を観測井ごとにみると、地下水位が低下した観測井は91井のうちの4井であり、低下量が最も大きいのは府中市武蔵台二丁目にある府中第 1 観測井の0.60mである。一方、地下水位が上昇したのは87井であり、上昇量が最も大きいのは稲城市矢野口にある稲城観測井の3.58mである。</p>	<p>また、1 年間の変動状況を見ると、<b>地下水位は、42地点すべてで上昇した。次に、変動状況を観測井ごとにみると、地下水位は91観測井すべてで上昇している。上昇量が最も大きいのは府中市武蔵台にある府中第 1 観測井の8.35mである。</b></p>